

2018年11月22日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 自分に対する錯誤

### 1. 概要

#### (1) 資料

増谷文雄著『阿含経典1』(ちくま学芸文庫)／人間の分析(五蘊)に関する経典群／蘊相応／06無常、07苦、08無我、09 無常なるもの

庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社

#### (2) 主題

阿含経典には「無常・苦・無我」をセットにした経文が、繰り返し現れます。「無常」「苦」「無我」とは、いったい何なのか、学んでみたいと思います。

### 2. 序文

#### (1) 経文「無常」「苦」「無我」「無常なるもの」共通

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァッティー(舎衛城)のジェータ(祇陀)林なるアナータピンディカ(給孤独)の園にましました。

その時、世尊は、もろもろの比丘たちに告げて、「比丘たちよ」と仰せられた。

「大徳よ」と彼ら比丘たちは答えた。

世尊は、このように説きたもうた。

(増谷文雄著『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p. 399、p. 400～401、p. 402、p. 403)

#### (2) 定型的な経文

この序文は、これから学ぶ四つの経文「無常」「苦」「無我」「無常なるもの」に共通しています。

かつては、釈迦牟尼世尊の説法を文字に表さず、口から口へと伝えてきました。このため記憶しやすいように、定型的な経文がいくつも生まれてきたようです。

### 3. 無常・苦・無我

#### (1) 経文

① 経文「無常」「比丘たちよ、色(肉体)は無常である」(同書、p. 399)

② 経文「苦」「比丘たちよ、色(肉体)は苦である」(同書、p. 401)

③ 経文「無我」「比丘たちよ、色(肉体)は無我である」(同書、p. 402)

(以下、受(感覚)、想(表象)、行(意志)、識(意識)について、同じように繰り返されます)

## (2) 共通

この三つの経文は、ここに挙げた部分が異なるだけで、前後はまったく同じです。

## (3) 悟り

釈迦牟尼世尊は、修行者たちに、五蘊(色・受・想・行・識)は「無常・苦・無我」とであると説きます。これらは、悟りの内容です。

## 4. 常と無常

## (1) 常

「常」とは「固定している、変化しない、いつまでも存在し続ける」という意味です。

まだ、釈迦牟尼世尊の教えを聞かない人々は、「自分は固定している、変化しない、いつまでも存在し続ける」と錯誤して、「無常なる自分」を「常なる自分」として生きようとします。

ここに、苦悩(苦苦・壊苦・行苦)が生じます。

## (2) 無常

経文に「色(肉体)は無常である」とあります。

釈迦牟尼世尊の教えを聞いて修行した修行者は、「自分は固定しない、変化する、やがて滅する」と悟り、「無常なる自分」を、そのまま生きます。

ここには、苦苦は生じて、壊苦・行苦は生じません。

## (3) 三苦

- ① 「苦苦」とは、「苦痛を苦とする」ということです。痛い、寒い、ひもじいなど、肉体の受ける苦痛です。「苦苦」は、修行をしていない人も、悟りを得た人も、同じように感じます。
- ② 「壊苦」は、「壊れる苦」です。自分に快きをもたらすものが壊れることによって生じる苦です。この苦は、修行をしていない人は味わいますが、修行の進んだ人は味わいません。
- ③ 「行苦」は、「ものごとが移り変わる苦」です。自分の心身が移り変わる、人の心が移り変わるなどによって生じる苦です。この苦も、修行をしていない人は味わいますが、修行の進んだ人は味わいません。

## 5. 楽(らく)と苦

## (1) 楽

「楽」とは、「たのしい、こころよい、安楽である」というような意味です。幸福感と言ってもいいでしょう。人は、五蘊(色・受・想・行・識)、または六処(眼・耳・鼻・舌・身・意)が味わう快きを「楽」とあると思い、執着し、追い求めます。

## (2) 苦

経文に、「比丘たちよ、色(肉体)は苦である」とあります。

「色(肉体)の快さを味わうことを『楽』だと思ふのはよいけれど、そこに渴愛を生じると、かえって『苦』を招きます」と、言っているのです。

## (3) 快さから欲望へ

五蘊(色・受・想・行・識)、六処(眼・耳・鼻・舌・身・意)における快さを味わうのは、自然なことです。原則的に、生存や健康に益するものは「快」を、害するものは「不快」を味わうようになっているからです。

快さを味わっていると、この快さを味わい続けたいという執着が生じます。執着が生じますと、快さに対する欲望が生じます。

食欲・性欲・睡眠欲・集団欲などは、生存や種の保存のために必要な欲であり、これらの欲が健康的にはたらいっている限り、何のさしさわりもありません。

## (4) 欲望から渴愛へ

欲望が大きくなり、強くなりますと、渴愛になります。ここからさしさわりが生じます。

渴愛が生じますと、渴愛を中心にものごとを考え、行動するようになります。(貪欲)

渴愛が満たされないと、怒りを生じます。(瞋恚)

渴愛を中心にするために、ものごとのすじみち、ことわり、法則などを無視した考えや行動を起こします。(愚痴)

その結果、さまざまな苦悩が生じるのです。

## 6. 我(が)と無我(むが)

## (1) 我(が)

「我(が)」とは、心身に執着して作り上げた、自分に対する錯誤です。

「常」の迷いによて生じた、「変化しない自分」「滅びない自分」「いつまでも存在し続ける自分」は「我(が)」にほかなりません。

「我(が)」は、自分に対する錯誤ですから、自分と現実との間にさまざまな摩擦や葛藤を生じ、苦悩が絶え間なく生じることとなります。

## (3) 無我

経文に、「色(肉体)は無我である」とあります。自分に対する錯誤が無くなりますと、ほんらいの自分が見えてきます。「ほんらいの自分」は「我(が)では無い」ので、「無我」といいます。

「無我」で生きれば、自分と現実との間に摩擦や葛藤を生じることはありませんから、苦悩が生じることはありません。

## 7. 無常・苦・無我の関係

### (1) 経文「無常なるもの」

「比丘たちよ、色(肉体)は無常である。無常なるものは苦である。苦なるものは無我である。無我なるものは、わが所有(もの)にあらず、わが我(が)にあらず、またわが本体にもあらず。まことに、かくのごとく、正しき智慧をもって観るがよい」(同書、p. 403~404)

(以下、受(感覚)、想(表象)、行(意志)、識(意識)について、同じように繰り返されます)

### (2) 色(肉体)は無常である

① 「色(肉体)は無常である」とあります。「心身がずっと変わらないでいることはありません、必ず変化します」ということです。

② 多くの人びとは、「心身は常である」と錯誤し、次のような迷いを生じます。

自分に都合の良い状態にあると、この状態がずっと続くという錯誤から、驕(おご)りが生じることがあります。

自分に都合の悪い状態にあると、この状態がずっと続くという錯誤から、絶望が生じることもあります。

「心身が常であって欲しい」という欲求から、「年齢を取りたくない、死にたくない」などという渴愛が生じることがあります。

③ 修行者たちは、「心身は無常である」と悟っていますから、このような驕り・絶望・渴愛などは生じません。楽があってもやがて苦に変わることに、苦があっても正しく対処すれば脱することができること、心身はやがて滅することなどを知っているからです。

### (3) 無常なるものは苦である

① 「無常なるものは苦である」とあります。「心身は無常ですから、心身の楽(快さ、幸福感)を得ても、やがて変化して苦が生じることになります」というような意味です。

② 自分に都合の良い状態がずっと続いてほしいと思っても、ずっと続くことはありません。都合の良い状態が変化すれば行苦が生じ、壊れれば壊苦が生じます。

### (4) 苦なるものは無我である

① 「苦なるものは無我である」とあります。「苦しむのは、我(が)があるからです。本当は無我なんです。苦しむ必要はないんです」と、言っているように思われます。

② 「我(が)」とは、自分を錯誤することです。これによって、ほんらいの自分が見失われます。「我(が)」がありますと、「我(が)」の満足を求め、歪んだ欲望を生じます。これは渴愛のひとつです。

渴愛は、三毒(貪欲・瞋恚・愚痴)を生み、苦悩が絶え間なく起こるようになります。

## (6) 我と無我

経文に、三つの「我(が)」が述べられています。

- ① 「わが所有(もの)」とは、この心身は、自分の所有物だと思い込む錯誤です。ここから、自分の所有だから、自分の思い通りになるし、していいのだというような慢心が生じます。

修行者は、「心身はわが所有ではない」と悟り、ものごとは縁起の通りになると悟って、真理を重んじます。

- ② 「わが我(が)」とは、この心身が、自分そのものであると錯誤することです。ここから、自分は一人で生きている、他人とは関係ない、他人の世話にはならないというような慢心を生じます。

修行者は、「心身はわが我(が)ではない」と悟り、自分は多くの人びととの、生かされ合い、生かし合いの関係の中で生きていると悟ります。

- ③ 「わが本体」とは、この心身が、自分の本体であると錯誤することです。ここから自分は永遠に存在し続けるなどと思い込み、身勝手な生き方をしたりします。

修行者は、「心身はわが本体ではない」と悟り、有意義な人生を送って、やがて訪れる死のときを迎えようという姿勢になります。

## (8) 正しい観察

「まことに、かくのごとく、正しき智慧をもって観るがよい」とあります。

「これまで学んできたように、自分のありのままを、正しい智慧で、より深く観察してごらんください。そうすれば、ほんらいの自分を見出すことができます」というような意味です。

## 9. 解脱

### (1) 経文「無常」「苦」「無我」「無常なるもの」共通

「比丘たちよ、わたしの教えを聞いた聖なる弟子たちは、そのように観て、色を厭い離れる。厭い離るれば貪欲を離れる。貪欲を離るれば解脱する」(同書、p. 399、p. 401、p. 402~403、p. 404)

### (2) 解脱

「色(肉体)」などの五蘊に対する錯誤に気づいた修行者は、錯誤を厭い、離れようと努力します。これが「色(肉体)を厭い離れる」ということです。

錯誤を離れば、錯誤に執着することから生じていた貪欲からも離れることができます。これが「厭い離るれば貪欲を離れる」ということです。

「貪欲を離るれば解脱する」とあります。自分に対する錯誤が無くなり、貪欲からも離れますと、これが解脱です。

## 10. 解脱の自覚

### (1) 経文「無常」「苦」「無我」「無常なるもの」共通

「解脱すれば、解脱したとの智を生じて、くわが迷いの生はすでに尽きた。清浄の行はすでに成った。作すべきことはすでに弁じた。このうえは、もはや迷いの生を繰返すことはないであろう」と知るのである」(同書、p. 399～400、p. 401、p. 403、p. 404)

### (2) 解脱の自覚

「解脱すれば、解脱したとの智を生じて」とあります。解脱した修行者が、自分は解脱したと自覚することです。

### (3) 自覚の内容

「わが迷いの生はすでに尽きた」とあります。「迷いの生」とは執着と錯誤で生きてきた人生です。執着と錯誤を捨てたので、迷いの生は尽きたのです。

「清浄の行はすでに成った」とあります。「清浄の行」とは「執着と錯誤の混じらない行」で、八正道(正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定)のことです。

「作すべきことはすでに弁じた」とあります。解脱に至るために必要な学習と修行を怠らず行ってきたことを言っているわけです。

「このうえは、もはや迷いの生を繰返すことはないであろう」とあります。迷いの人生がなくなって、これからは悟りの人生を歩んでいきます。